「おさしづ」語句の探求（18）

第１巻における「道」まとめ①

おやさと研究所助教
澤井　治郎　*Jiro Sawai*

これまで、「刻限」、あるいは、「本部事情」「本席の身上伺」「個人の身上・事情の伺」など、『おさしづ改修版』第１巻をいくつかに分けて、それぞれにおいて「道」という言葉が用いられる脈絡や特徴的な用例を確認してきた。今回は、それをまとめて、『おさしづ改修版』第１巻において「道」を用いて諭される大きな流れを、当時の本教の史的状況と関連させながら確認することにしたい。

「道」の「おさしづ」の推移

「道」がどのような流れにおいて用いられているかを明らかにするために、「道」が３回以上用いられている「おさしづ」に注目して整理すると、明治 20 年から 21 年３月初めまでは、そのほとんど（９割近く）が「個人の身上・事情の伺」の「おさしづ」である。この時期に「刻限」は６件あるものの、「本部事情」はわずか２件、「本席の身上伺」は０件というように、ほとんど出ていない。それに対して、「個人の身上・事情の伺」において「道」が用いられるのはこの時期が最も多い。

しかし、明治 21 年３月以後、具体的に言えば、「東京へ出張の上、本部を設立するの運びに掛かる」ことになる明治 21 年３月９日（陰暦正月二十七日）の「おさしづ」を境にして、「刻限」や「本席の身上伺」あるいは「本部事情」の「おさしづ」が増えている。特に、３月から 11 月頃にかけて「本部事情」の伺いにおいて、教会本部設置認可の運動に東京へ出立する人々の心の置き所を伺ったり、東京府で認可された教会本部をぢばへ引き移すことに関する取り扱い方を伺った「おさしづ」の中で、「道」を用いた諭しが頻繁に見られる。また、「本部事情」の「おさしづ」に続いて、５月から９月にかけて断続的に「本席の身上伺」があり、そのなかで「道」が頻繁に用いられている。ここでは、東京府で認可された教会本部を早くぢばへ引き移すことを、本席の身上に知らせて説かれている。さらに、「刻限」においては、ぢばに教会本部が引き移され、形の上では教会組織の整ってくる明治 21 年の 11 月以降に「道」を用いた諭しが頻繁に見られるようになる。

それに対して、「個人の身上・事情の伺」の「おさしづ」の件数じたいは増加傾向にあるものの、「道」が用いられている「おさしづ」の件数は減っている。

こうした件数の推移からすると、明治 20 年にはおもに「個人の身上・事情の伺」の「おさしづ」において「道」を用いた諭しが説かれているが、明治 21 年３月以降は「刻限」や「本部事情」、「本席の身上伺」へその諭しの場が移っていると見ることができる。このように、「おさしづ」において「道」が用いられる流れは、明治 21 年３月に教会本部の設立運動が始まり、４月に認可がなされる教会本部の設置と密接に関わっていることが分かる。

細い道は通りよい、往還道は通り難（に）くい

このように件数上、布教が公認される教会本部の設置認可があって、それ以後、「本部事情」や「本席の身上伺」において「道」を用いての諭しが頻繁になされている。そうした、「道」が用いられる「おさしづ」の種類が変化するとともに、「道」の用例にも変化が見られる。

明治 21 年３月以前の「個人の身上・事情の伺」において用いられている「道」は、多様な個人的脈絡に対して説かれたものが多いために、その特徴を述べるのはかなり難しいが、印象に残る点を簡単に述べると、「道のため」といった固有名詞的に用いられている用例や、“良い道もあれば悪い道もある”といった人生論的な用例、あるいは、「天然自然の道」など親神にもたれて通ることを諭されているような用例が、組み合わせられて説かれている。

ところが、明治 21 年３月以後の「おさしづ」においては、説かれる内容が大きく異なっている。明治 21 年３月９日の「おさしづ」において、教会本部を設立することについて伺われると、「元々の思案、神の道というものは、よう聞いて置かねばならん」と心の置き所を諭されるとともに、「どんな道も連れて通ろう」とのお言葉をもって許されている。それから数日間、教会本部の設置認可のために東京に人を派遣するなどの伺いや願いに対しても、「どういう道も連れて通ろう」などと、認可に向けて当時の人々を後押しされる諭しがなされている。

そして、４月 10 日に教会本部は認可されるが、その後、最初に「道」が３回以上用いられる「おさしづ」は次のものである。

明治 21 年４月 16 日（梅谷四郎兵衛歯の痛みに付願）

> 今の道は一寸付けたる処、細い〳〵道や。これは世界の道や。世界ではえらいと言う。神の道は、今までに聞いても居る、聞かしてもある。未だ〳〵どんな道付けるやら、どんな守護するやら知れんで。どんな事を言い掛けるやら知れんで。どんな働きをしに掛かるやら知れんで。……その心得で居るがよい。

これが、「神の道」と「世界の道」を明確に対比させて説かれた最初の「おさしづ」である。表面上は、梅谷四郎兵衛個人の身上の伺いに対する「おさしづ」であるが、初代真柱の上京中、梅谷がお屋敷の留守を預かっていたという当時の状況を考えると、単に個人に対するものというよりも、本教全体の心得を諭されたものと解される。これ以後、「世界の道」と「神の道」あるいは「神一条の道」を対比した諭しが何度も出てくるようになる。その二つの道の関係は、たとえば、「新しい道」と「古き道」や、「表の道」と「裏の道」、あるいは、「往還道」と「細い道」など対比して説明され、後者の道を通ることが肝心であり、それによっていわゆる「世界の道」も連れて通る、と繰り返し説かれている。

こうした諭しは、教会本部の設置認可、すなわち、布教公認後に頻繁に見られるようになるわけであるが、明治 21 年 11 月にぢばにおいて教会本部開筵式がつとめられ、一連の教会本部の手続きに関する事柄が一段落した後も続いている。特に、明治 22 年の後半から明治 23 年の前半にかけて、多くの「往還道」と「細い道」の用例があり、「細い道は通りよい、往還道は通り難くい」というお言葉が説かれている。布教公認を得て、外部からの干渉のない往還道に出て、教祖ひながたの道を通ることを忘れてはならない。教祖ひながたの道こそ、陽気ぐらしの道であると言われる。それは、各地に本教の教会が出来て、だんだんと教会組織が形成される頃であり、大事なことは教会という組織が大きくなることではなく、一人ひとりの真実の心をしっかり見定めて歩むことであると諭されている。このような「世界の道」と「神の道」の対比による諭しは、第１巻の最後まで見られる。